

ま え が き

新教科として設定された生活科の誕生は、戦後の教育改訂の中でも、道徳の特設と並ぶ大きな意義を持つとされています。そして生活科が登場してきたのには、それなりの背景があることも指摘されています。

それは、低学年の発達段階に合わせた小学校教育を、という考え方でした。教師主導型の、教え込む授業から、子ども達の活動や体験を主軸にした授業に変えていくことで、幼稚園の遊び中心の「保育」で育ってきた子ども達が、スムーズに小学校教育に溶け込めるようにすることをねらっていると言われています。

このような考え方を受けて、本校では、昭和61年度、「生活科プロジェクトチーム」を作り、生活科の趣旨、めざすべき方向などを的確にとらえる為の学習をつみ重ねました。生活科研究のスタートをきった年です。

昭和62年度には、趣旨に沿った実践を試みました。いくつかの実践をして、私たちが学んだことは、生活科にとって、体験することが他の教科以上に大切であるということでした。この年の12月、教育課程審議会から、「幼稚園、小学校、中学校及び高等学校の教育課程の改善について」の答申が出され、生活科の設定趣旨、目的と内容、構成が明確に示され、位置付けられました。この答申に沿って、翌63年度、私たちは、現行の社会科・理科と併行した形ではありましたが、生活科のカリキュラムを作成し実践をつみ重ねながら、本校の生活科の基本的な理念を明らかにすることに努めてきました。この年は、本校では、「自己教育力の育成—ゆれのある学習—」をテーマにして続けた研究のまとめの年でした。生活科は、教科の理念を見出すことを研究の力点としていたため、このテーマに直接かかわることなく実践をつみ重ねてきました。

平成元年度、ようやく生活科は一つの教科として独立し、独自のカリキュラムに従って実践を行うことができるようになりました。同時に、本校での新しい研究テーマ「自己を拓く——主体者としてかかわる学習」にもかかわり、私たちはそれに沿った生活科のあり方を探っています。

生活科が、子どもたちにどのように反映し、どのような教育的効果が表れるかは、教師である私たちによるところが多いと思われます。言いかえれば、生活科の誕生によって変わることを余儀なくされるのは、子どもたちではなく、私たち教師なのだということです。

私たちのこれまでの歩みを振り返り、明日からの実践をより確かなものにしていきたいと念じています。多くの先生方のご鞭撻とご指導にあわせて、本冊子についてのご批判、ご意見を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成2年5月

金沢大学教育学部附属小学校